学生相談の歴史に果たした心理臨床の役割

甲南大学学生相談室　高　石　恭　子

Ⅰ．はじめに

わが国における組織的な学生相談の歴史は、戦後まもなくに始まる。関係者にはよく知られていることだが、新制大学発足２年後の1951年、アメリカ教育審議会よりW. P. ロイド博士ほか６名の専門家使節団が派遣され、SPS（Student Personnel Services＝厚生補導、後に「学生助育」という訳語が充てられた）の理念と実際が紹介された。その理念とは、「学生を各種の人間的欲求を持って生活し成長する主体であると見なす観点に立ち、その発達と成熟を助長し援助する」ことであり、「もとよりこれは広義の教育活動の一環であり、あるいは教育そのものである」とされている（『学生助育総論』1953）。科学的な方法論をもって学生の全人的な統合を目指すことが、大学教育の重要な使命だとするこの考え方は、すでに大衆化時代を迎えていたアメリカの高等教育の理念として、まだ戦前のエリート高等教育の経験とイメージしかなかった当時のわが国の大学人に、強いインパクトを与えるものであったに違いない。

SPSのなかには、Admission（入学許可）、Orientation（入学直前直後のガイダンス）、Housing and Food Service（寮、下宿の斡旋と食堂の設置、栄養管理）、Counseling（修学、進路、個人適応の相談）、Student Activities（自治会・課外活動への助言指導）、Financial Assistance（奨学金、アルバイトの斡旋など）、Health Service（保健活動、衛生管理）、Placement（就職の斡旋）という８つの領域が含まれ、それらは全体で厚生補導＝広義の学生相談を意味している。しかしながら、その後のわが国における学生相談は、理念と内容においてさまざまな混乱と紆余曲折を経ることになった。詳細は後節で述べるが、SPSを「学生助育」と訳し、このうちのStudent Counselingを「学生相談」と訳したことも、混乱の一因として、少なからず作用していると考えられる。

学生相談とはいったい何なのかを定義することは、その言葉の用いられ方と混乱した歴史からも、今もって困難な課題である。学生個々人の人間的成長を促す活動すべてを指すのか、カウンセリングという専門的技法に基づく活動のみを指すのかは、用いられる文脈や語る人の立場によって定まらないままである。そして、そのことは学生相談を担う者のアイデンティティや、学生相談の評価にもゆらぎと影を与えてきたと言える。

筆者が心理臨床（臨床心理学）のトレーニングを終え、学生相談の仕事に携わるようになったのは1989年（平成元年）であるが、当時の学生相談カウンセラーの置かれた状況は非常に複雑で不安定なものであった。もちろん、2008年の現在でも、多くの学生相談カウンセラーが不安定な身分のまま活動に従事しているのが実情だが、それ以前の問題として、現在よりはるかに情緒的に複雑な反応に晒されていたという意味である。

当時の筆者が肌で感じたその情緒的反応とは、SPSの研修を受けて学生相談に従事してきた大学教職員からの、「専門家不要」という批判的なそれと、個人心理療法を最も純粋な心理臨床活動と見なす専門家（とその学徒）からの、「無料で治療構造のあいまいな亜流の心理療法」と軽視するそれであったと思い出す。何より、筆者を震撼とさせたのは、長く学生相談の任にあたってきた教員が、「学生相談カウンセラーは、大学のぼろ雑巾」と自身の立場を揶揄した、ある講演での言葉であった。

雑巾とは、大学の汚れた部分（病理や問題をもっ

た学生）をふき取り（治し、あるいは立ち直らせ）、その分だけ汚れて（疲れて）使い物にならなくなったら捨てられるということの比喩である。SPSの流れを汲む学生相談の世界からも、ちょうどこのころ大学での学問的地位を確立した心理臨床の世界からも、双方から学生相談カウンセラーは周辺人の扱いを受け、孤軍奮闘を強いられていた。それは、国公私立を問わず、わが国の多くの高等教育現場で起きていた現象であったと思う。

そのようななかで、筆者が一貫して模索してきたのは、心理臨床の視点と理論的基盤をもちながら、かつ「使い捨てられる専門家」にならないために、すなわち大学というコミュニティの一成員となるために、どうすればよいかということであった。近年、戦後の「学生助育」の原点に回帰するかのように、「学生相談は教育の一環である」という理念が学生相談従事者から主張されるようになっているが、そこには、大衆化時代を過ぎ、1990年代後半以降、ユニバーサル・アクセス化した（進学率が50％を越える）高等教育の事情も深く関係していると考えられる。さまざまな背景とニーズをもって在籍する多様な学生を受け入れ、送り出すためには、学問的知の追求を可能にする「主体」の成長を促すためのしくみ＝学生相談を、大学教育のなかにしっかりと定位せざるを得ない必然性が生まれてきたということである。

ここで気をつけておかねばならないのは、学生相談が「教育」のなかに吸収されていくとき、再びその専門性が曖昧になり、学生相談カウンセラーの存在意義がゆらいでいくかもしれないという問題である。過去の困難を繰り返さないためにも、結局、学生相談とはいかなる理念のもと、いかなる活動を行うものなのか、問い続けていく努力が求められている。そこで、本稿では、わが国の学生相談の歴史を振り返り、そこに心理臨床という専門性がどのように導入されてきたか、また心理臨床が学生相談にどのような役割を果たしてきたかについて、整理し、考察してみたい。とりわけ、その導入にあたって大きな役割を果たした河合隼雄の功績を振り返り、記録にとどめたい。そしてそこから、今後の学生相談の進むべき方向性について、なにがしかの示唆を得られたらと思う。

Ⅱ．わが国の学生相談と心理臨床の歴史

二つの分裂と学生運動の波

戦後わが国の学生相談は、そのインパクトあるアメリカからの導入と熱心な新制大学人の歓迎にもかかわらず、二つの分裂と、学生運動の波によって発展に困難を抱えてきた歴史がある。

大山（1999）によると、困難の背景には、ドイツのエリート大学（学生の自主独立を重んじる）を規範としたわが国の旧制大学の土壌に、アメリカの民主的大衆化大学（大学は未熟な学生を社会人に育てるための人格・教養・職業教育の場と考える）の理念が、なかなか根づかなかったという文化的葛藤の問題がまずあったということだが、それよりも痛手となったのは、医療と学生相談（心理領域）をめぐるアカデミズムにおける政治的分裂、管理と育成をめぐる大学組織対学生の対立だったのではないかと筆者は考える。さらに、学生相談領域内部でも、関東と関西の異なる文化的土壌はなかなか溶け合うことが難しく、関係者の総力を結集できない状況が長く続いたことも大きく影響したと言えるだろう。

いくつかの文献を参考に、戦後の大学と東西の学生相談に関連する今日までのトピックを整理してみたのが、表１である。あくまで筆者の把握した範囲で、筆者の視点からまとめたものであるので、重要事項が漏れているかもしれないが、そこはご寛恕いただきたい。

表１の左列は、「全国」と見出しをつけているが、学生相談関連については「関東」と読み替えても差し支えない。国際都市・首都東京を中心とする関東には、異文化（主にアメリカ）の価値観やカウンセリングの技法が受け入れやすい条件が、当時から関西よりも整っていたのではなかろうか。

表1　学生相談関連年表

全国の大学と学生相談の歴史	関西の学生相談の歴史と河合略史
1951　6人の委員がアメリカから来日（SPSの紹介）	
1953　東大・山口大に学生相談所開設	
1955　学生相談研究会発足（伊東博・他）	
	1956　京大　学生懇話室設置
	1957　甲南大学が学生部内に学生相談室開設
	1959　KSCA（近畿学生相談研究会）発足
	1959-1961　河合隼雄　アメリカ・UCLA留学
1960　安保闘争	1960　KSCA第1回例会
1961　C.ロジャーズ来日	
1962　第1回全国学生相談研修会開催 国大協　第3・第4常置委員会の分裂	1962-1965　河合　スイス・ユング研究所留学
1963　国立大学の学生相談室設立途絶える	
1966　保健管理センター設置開始	1966　京大　保健管理センター設置
1968　全国学生相談研究会議発足／大学紛争	1968　河合（天理大助教授）KSCA特別例会講演 「精神分析と心理療法」
1970　学生相談研究会　アメリカから講師招聘開始	1971　河合（天理大教授）KSCA例会講演 「カウンセリングの実際問題」
	1972　河合　京大着任
	1973　河合（京大助教授）KSCA例会講演 「大学におけるカウンセリングはいかにあるべきか」
1979　共通一次試験開始	1979　河合（京大教授）全国学生相談研究会議 京都シンポ司会「家庭からの自立をめぐる問題」
	1980　河合　KSCA特別例会講演「漫画と青年期の感性」
	1983　石井完一郎　京大退官
	1985　河合　全国学生相談研究会議　三河シンポ司会 「私の治療事例――その治癒機転と技法の検討」
1987　学生相談研究会⇒日本学生相談学会発足	
	1988　臨床心理士資格　財団認定開始（会長　河合）
	1989　河合　京大退官／甲南大学相⇒学生部より独立
1990　大学入試センター試験開始	1990　石井完一郎　逝去 河合（国際日本文化研究センター教授） 全国学生相談研究会議　第6代会長就任
1991　大学設置基準の改正（教養教育廃止）	1991　河合　日本学生相談学会講演「青年期と現代」
	1997　甲南大学相⇒カウンセリングセンターに統合
	1999　京大学生懇話室⇒カウンセリングセンターに改組
2000　文部省廣中レポート（学生中心の大学へ）	
2001　大学カウンセラー資格　学会認定開始	
	2002　河合　文化庁長官就任
2007　日本学生支援機構報告書（学生相談体制の充実）	2007　河合隼雄　逝去

最初の分裂は、学生相談に関する東西の研究会の開催に見られる。伊東博、杉溪一言、三隅二不二の諸氏を中心にして1955年に発足した学生相談研究会についての、杉溪の「当初は『日本』をつけなかった。これは関西に遠慮したためである」という言及が、そのころの事情を物語っている（中澤他，1995）。関東の学生相談が、アメリカでガイダンスとカウンセリングを学び、学位を取って帰国した新進の研究者を推進役として発展していったのに対し、関西の学生相談は、京大学生懇話室の石井完一郎氏を推進役として、C.ロジャーズの来談者中心療法（クライエント・センタード・アプローチ）の理論に基づき、すべての教職員がカウンセリングマインドを身につけて発展させていこうとする気運に満ちていた。

とくに関西においては、ロジャーズ（牧師でもある）が伝統的なアメリカの精神分析（医療の専門家集団の行う特権者の心理療法）に対するアン

チ・テーゼとして主張した「診断不要」「受容と共感的理解によって人は成長する」という考えが、背景を抜きにいささか独り歩きをし、学生相談における専門家不要論ないし、反アカデミズムの風潮を生み出したことは、残念な経過であったと言えるかもしれない。筆者は石井の講義を学部生時代に直接受ける機会に恵まれたが、彼自身は戦時のトラウマ体験と、キリスト教の信仰と価値観に基づいたカウンセリングの信念をもっていたと記憶する。しかしながら、いささか教条的に来談者中心療法を受け入れ、宗教的な厳しさ抜きで、学生を育てる「ロマンチックな夢」（安藤，1991）を描いた学生部職員たちの再研修の場となった関西の学生相談研究会（近畿学生相談研究会：KSCA）は、良くも悪くも善意と「手弁当」の精神を以後長く継承し、関東とは別個の道を歩むことになった。

第２の分裂は、国立大学協会（略称、国大協）における委員会の決裂である。全国国立大学の学長からなる審議機関である国大協には、主として厚生補導（広義の学生相談）について協議する第３常置委員会と、主として健康管理について協議する第４常置委員会があり、1960年代初めまでは両者が合同で討議を行っていたという（小柳，1989「大学と学生」第281号所収論文、他）。第３委員会のメンバーであった石井は、医療と相談の区別を強く訴え、一時は多数の相談担当教官の配置を全国規模で予算要求していた。しかし、1962年に両委員会は決裂し、以後、文部省は保健管理センター構想を進めて、健康管理の理念の下に、学生相談を組み入れていくことになったのである。1966年以降、国公立大学の学生相談カウンセラーは、教官身分で保健管理組織（医療モデル）の中に属するか、事務職員として学生部（SPS モデル）に配属されるかに分断されていく。保健管理組織に組み込まれた教官カウンセラーにとっては、それは医療と心理の政治的闘争（ポスト争い）に巻き込まれることも意味していた。

これら２つの分裂に、さらに追い討ちをかけたのが、SPS と学生運動との不幸な関係だったと考えられる。1960年から1970年の安保闘争を中心とする学生運動の波は、学生部職員を“学生対策”に否応なく駆り立て、SPS の理念も、学生にとっては「思想の管理強化」としてしか受け取られなくなっていった。ここから、わが国の学生相談の長い停滞の時代が続くことは、皮肉な歴史と言わねばなるまい。

学生相談の５つの時期と心理臨床の導入

わが国の学生相談・学生支援の歴史的流れを再整理した齋藤によると（齋藤，2004「大学と学生」第２号所収論文）、戦後の学生相談は、＜黎明期1946～＞＜充実期1953～＞＜衰退期1960～＞＜停滞期1970～＞＜再興期2000～＞と、５つの時期に区分される。つまり、充実の気運はたった７年しか続かず、学生運動の波とぶつかって衰退した学生相談は、1970年代から30年間の長きにわたって見るべき変化がなかったという認識である。1990年代後半から急速に大学と学生のありようが変化したのを受けて、ようやく2000年に、文部省高等教育局が「大学における学生生活の充実方策について――学生の立場に立った大学づくりを目指して――」（通称、廣中レポート）という報告書を出して「カウンセラー等の充実による学生相談機関の整備が必要」と謳うまで、全国的な組織化の次元では何ら発展が見られなかったというこの認識に対しては、いったいどう考えればよいのだろうか。

ここで、表１の右列を改めて見て欲しい。関西の学生相談と、河合隼雄の学生相談関連の事項を併せて年代順にまとめている。注目すべきは、ちょうど1950年代末～1960年代半ばの、学生相談における＜充実期＞から＜衰退期＞にかけての変動の時期に、河合は海外留学のため不在だったという偶然である。いや、偶然というよりは、騒然とした当時の大学の状況に限界を感じて、意図して海

外に学んだのかもしれない。そして、その多様で膨大な業績のなかでは取り上げられることが少ないが、1965年に帰国後、河合は学生相談の主な研究会議や学会で、重要な役割を果たしていくのである。

河合の帰国当時、わが国のカウンセリング界はロジャーズの来談者中心療法が全盛であった。複数の心理臨床家が揃って回想しているが、当時は「カウンセリングにかかわる者は皆、ロジャーズの提唱する『受容』『共感』『純粋さ』の３原則の実施に懸命に専心し」「カウンセリング場面の録音を起こして逐語録を作り」「悪戦苦闘して指導を受けていた」が、「理論的な枠組みをもつことが否定されていた」ために、どのようにクライエントの心に起きていることを理解すればよいかがわからなかった（伊藤，2007「臨床心理学」43所収論文）。「（来談者中心療法の）応答練習は、セラピストの個性を奪い（中略）、実際にそのような弊害が出始めていた」（岡田，同所収論文）。そして、そのような行き詰った状況は、学生相談の現場においても例外ではなかった。

河合が帰国後に果たした役割は、KSCAや全国学生相談研究会議での演題からも垣間見えるように、来談者中心療法とカウンセリングマインドに頼っていた当時の学生相談の現場に、ユング派の分析心理学を基礎に置いた「心理療法」を導入したことである。「カウンセリング」を、主として言語的対話による主体の心理的成長の促進と定義するならば、「心理療法」は、無意識のイメージを含めた言語・非言語の交流による主体の回復と癒しを意味する。夢、箱庭、ロールシャッハテストといった、無意識的なこころの領域への接近方法を体系的に示してくれる河合の講義・講演には、常に多くの聴衆が集まったと聞くが、独りそれぞれの職場で苦闘していたカウンセラーにとって、河合の直接的な教えは、希望と力づけを与えるものであったことは想像に難くない。公刊された資料が手元にないので詳細な時期は不明だが、氏は京大在職中に学生懇話室の運営にも積極的にかかわり、保健管理センターからの独立性を援護する大きな役割を果たした。

筆者がタイトルに掲げた「心理臨床」とは、無意識の心理への接近も含めた、専門的技法と理論に基づく人と人の関わりを意味する言葉として用いており、カウンセリングよりも深く広い内容を含んでいる。わが国の学生相談（厚生補導としての広義の学生相談と来談者中心療法に基づいた学生カウンセリング）の領域に、心理臨床の視点を導入した河合の功績は、まだまだこれから再評価されるべき重要性をもっているのではなかろうか。

この、1960年代末から1980年代末の20年ほどの間は、わが国の大学において心理臨床学が発展と成熟に向けて苦闘した、一時代であった。この時代は、学生相談の視点からは、「専門家たる学生相談のカウンセラーがややもすると狭義の専門性に囚われた『心理治療』的な活動に終始していた」時代として批判的に総括される（齋藤，2004「大学と学生」第２号所収論文）。しかしながら、保健管理センターに所属する教官カウンセラーにあっては、他の教官と同様の研究業績を求められてスクリーニング活動（テストによる、心身の問題をもつ学生の発見と早期対応）に労力を割かねばならなかった事情があり、また学生部所属のカウンセラーにおいても、徐々に増えるアパシーの学生や、境界例などの人格障害を抱える学生への困難な対応を迫られ、心理臨床の専門的知識と技量を求めざるを得なかった必然的なりゆきを軽視するわけにはいかないのではないかと思う。

1988年末、満を持して、「臨床心理士」資格の認定が開始されたことも、学生相談の領域に大きな変化をもたらした。1989年、甲南大学の学生相談室が学生部所属から学長直属に改組され、「臨床心理士」２名がカウンセラーとして業務委託採用されたことをはじめ、京都女子大学は翌年の専任カウンセラー採用に際し、「臨床心理士の資格を有する者であることが望ましい」という一文を

新規程に条文として盛り込んだ（大塚，1992「現代のエスプリ」294所収、学生相談めぐり）。とくに私立大学においては、学生相談を臨床心理士が担う例が増え、1995年の文部省によるスクールカウンセラー制度導入（公立中学校への臨床心理士の配置）への道を拓く、基礎作りの一端を担ったと言える。

改めて振り返ると、筆者が学生相談の現場に参入したのは、学生相談研究会が学会になり、臨床心理士資格認定が始まって心理臨床の「専門性」が目に見える形となり、SPSの精神を伝え続けた石井が逝去し、河合が全国学生相談研究会議の長となるという、学生相談の大きな転換点にさしかかった時期であった。齋藤の言う＜停滞期＞とは、実は目に見えない深部で大きな変容が起きている、学生相談にとっての“さなぎ”の時期だったのかもしれない。実際、個々のカウンセラーにおいては、クリニック機能に偏りすぎているという批判に対して、たとえば「療学援助」「心理臨生」といった新たな概念を用いて、医療モデルと異なる学生相談の理念を説明しようとする努力も行われていた（峰松，1996「こころの科学」69所収論文）。筆者も、周辺人の扱いを受けながら、なおまっすぐに立ち、学生相談の領域に踏みとどまることができたのは、河合の示した心理臨床の視点が、決して狭い病理―治療モデルにとどまらず、氏の高校教師の経験を原点にもつ「人を育てる」営みに通じるものであったからではないかと思う。

2000年以降の＜再興期＞とは、学生相談が一部の問題をもった学生への対応ではなく、すべての学生の全人的育成にかかわる教育活動であると主張する、学生助育の原点を再確認するかのような、近年の気運の盛り上がりを指している。「学生助育総論」から半世紀を経て、心理臨床の視点を深く取り込んだ学生相談の新しい理念は、2007年に学生支援機構から出された報告書「大学における学生相談体制の充実方策について――『総合的な学生支援』と『専門的な学生相談』の『連携・協働』――」のなかに描き出された。ここでは、かつてのSPS（厚生補導、あるいは学生助育）は「学生支援」という言葉に変えられ、「学生相談」は専門的活動として狭義に規定されている。多くの大学で、文科省から助成を受け、「学生支援センター」「学生支援室」「学生サポートルーム」といった新しい機関が設立される気運のなかで、学生相談の専門性とは何かを、東西の学生相談カウンセラーの知を結集して構築していかねばならない時代を迎えていると言えるだろう。

Ⅲ．現代の青年期像と学生相談のモデル

学生相談の理念を問う試み

学生相談の理念と活動の内容が体系的に述べられた出版物が、政府や学会の冊子以外に初めて公刊され、一般の人々の目に触れるようになったのは、ようやく1990年代以降のことである。それ以前にも、各大学の学生相談室報告書やいくつかの出版物において、議論や紹介がなされてきたが、1991～92年にかけて出された4冊の「現代のエスプリ」誌のキャンパス・カウンセリングシリーズは、九大、東大、京大、名大という4つの国公立大学の教官カウンセラーを中心に編纂されたものであり、初めて東西の学生相談担当者が誌上に集って議論する、画期的な試みであったと言えよう。

一方、1994年に出版された『学生相談』（監修：都留）は、ICU（国際基督教大）を中心とする私立大学の教員カウンセラーを中心に編纂されたものである。そこでは、学生相談のモデルはほぼ「教育」「クリニック」「コミュニティ」の3つに分類され、戦後わが国の学生相談が、学生生活の向上のためのコミュニティモデルを基盤にしてやってきたが、そこにクリニックモデルの導入の是非を問う議論が1980年代になされたことが、振り返られている。著者の一人である小谷は、「学生相談理論の構築に向けて」という章のなかで、自身が「他の機関ではケアに乗り難いものの学生相談には乗ってくる一群の学生、すなわち境界例を代

表とする性格障害群の来談例が増加していったことから、体系的心理療法手法を提供するクリニック機能の重要性と強化を主張」したが、クリニックモデルは学生相談の本務ではないとする批判を受け、十分な理解を得られなかったと述べている。しかし、小谷の言うクリニックモデルとは、しばしば誤解される「医療モデル」とは異なる、「心理臨床モデル」のことであり、まさに河合が学生相談の領域に導入した専門性の基盤を指していたのだと考えられる。

この３つのモデルを統合する方向に学生相談の理念を定置しようとする試みは、齋藤（1999）によって「大学教育」「心理臨床」「厚生補導」と言い換えられ、これらの総体が「学生相談モデル」を形成するとして、３つの重なり合う円が概念図として提示されるに至る。しかしながら、総体としての広がりと、学生相談の専門性をどこに立脚させるかを同時に追究することは、実際にはなかなか難しい作業だと言わねばなるまい。表１にも挙げた、河合が全体講演を行った1991年の日本学生相談学会における大会企画シンポジウムのテーマは「学生相談と専門性」であり、そこでは「オールラウンドな専門性」という言葉が用いられている。しかしながら、健康教育も、心理療法も、修学環境にはたらきかけるケースワークも、「すべて学生相談」と包括的に考えていくと、再び学生相談の専門性とは何かという問題に突き当たることは、必至ではなかろうか。

1998年に出版された『学生相談と心理臨床』（河合・藤原編）は、その専門性に対して心理臨床の立場から一つの答えを示したものと位置づけられる。そもそも、臨床心理士の資格認定から10年が過ぎ、初心者ではない中堅の専門家向けに実践的テキストとして編まれた全６巻のシリーズのうち、１巻がそっくり「学生相談」に充てられたという判断は、当時としては驚くべきことであった。そこには、河合の学生相談に対する重視の姿勢と、すでに臨床心理士にとって学生相談は大きな比率を占める職域になっていた事実が反映されていたのだと考えられる。

本書で河合は、学生相談は「心の専門家」が担当すべきであり、その専門性は、「見立て」の力として示されることを、具体的な例を挙げて述べている。学生相談カウンセラーは、青年期の心理的課題（今日では「ライフサイクルの節目の心理的課題」と言い換えられよう）について理論的知識を十分にもち、病理水準の判断ができる臨床心理学または精神医学の知識をもつことが必要であると明確に規定している。さらに共編者の藤原は、独自の理念と方法論を実現するための新しい学生相談像を、⑴学生主体への個別的な相談活動、⑵修学問題を主たる接点にした相談活動、⑶臨床心理学的な専門的方法による相談活動、⑷ライフサイクルにおける学生期の意味を考える相談活動、⑸全学的な学校教育システムの一環としての相談活動、という５つの視点から整理し、また別の箇所では、「これからの学生相談像の立脚点を深く考えることは、すなわち学生相談担当者に限られた課題というよりも、心理臨床家のアイデンティティを問う本質的な課題でもある」とさえ述べている。学生相談の専門性とは何かを考えることは、初期の狭い個人心理療法のモデルから離れ、教育、司法、医療、福祉と、さまざまな現場に根を下ろし始めた近年の心理臨床家に共通する、普遍的課題に取組むことを意味するのであろう。

新たな青年期像と心理臨床の果たす役割

学生相談に心理臨床が積極的に導入されるようになった具体的な契機は、境界例や自己愛人格障害をはじめとする1980年代の新たな青年期の病理の登場であったことは、学生相談の文献の諸所に触れられている通りである。その後20年を経て、病理と非病理の境界はますますあいまいになり、青年期のこころの問題の表れ方も、時代と共に変化してきた。たとえば境界例はすっかり影を潜め、代わりに登場してきたのは、大学不登校／社会的

ひきこもり、自傷、OD（薬物の大量摂取）、ストーキング、ネット依存などの「悩めない若者たち」、すなわち、抑圧より解離の防衛機制を優勢とする、非／反社会的な行動化をする一群の人々である。

わが国の大学期が、管理教育のなかで先送りされた思春期の発達課題に取組む時間となっている状況については、1980年代から村瀬（1981，笠原・山田編『キャンパスの症状群』所収）などによってつとに指摘されてきたことであるが、その「思春期心性の遷延」の問題は、21世紀になってますます深刻化してきているように感じられる。河合（1994）は、青年期について唯一まとまった論考を行ったその著書のなかで、今日の青年が、かつての伝統的社会における成人化過程とは全く異なり、既成の大人社会に参入することと、社会自体を進歩させていく役割を期待されていることの、相反する２つの課題を同時に与えられる困難を抱えていると分析している。それは、「思春期のイニシエーションを経て大人に生まれ変わること」と、「いつまでも思春期の“可能態”を生き続けること」を、同時に要求される状況と言い換えてみることもできるだろう。モラトリアム人間、アイデンティティ拡散症候群など、さまざまな名前で概念化されてきた戦後の青年の状況は、思春期心性と時代社会との関係のなかで生まれてきた、同じ根をもつ問題なのである。

河合はまた、かつての青年が、個々の母親の守りから「若者集団」や「会社集団」という母性的な守りに移行するという社会のシステムに支えられ、青年期には「個人的無意識」の葛藤に直面するだけでよかったところが、今日の青年は、そのような社会の守りを失って、いきなり若いうちから「普遍的無意識」の領域の内容と直面せざるを得なくなったのではないかと指摘する。自我をどのように作り上げればよいかというモデルのない社会で、青年は個々に、「ユングが自己実現と呼んだような深い層の無意識的内容と取り組みつつ自我を形成する」か、内的な仕事をさらに（中年期まで）先送りし続けるか、の選択を余儀なくされているというのである。筆者の実感としても、学生相談の場に現れる近年の学生は、自身の抱える課題を容易には“言語化”できない例が増えている。何が苦しいのか、何を求めているのか掴めず、自身をもてあまし、まるごとカウンセラーに預けてくる様子は、病理というよりも、「育ち」の課題を抱えている状況を表していると言える。

考えてみれば、自傷、OD、昨今の軽症化した摂食障害、ストーキング、家庭内暴力、ひきこもりなどの行動化は、きわめて嗜癖（依存症）に近い心理的機制の上に成立する問題ではなかろうか。彼らが無意識的に求めているのは、物質や他者への依存的融合によって、自他の境界を否認し、母性的な一体感のなかへと退行的にとどまり続けることである。たとえば反復される自傷行為（リストカット）の背後に動いている感情について、時間をかけてクライエントの学生と言語化の作業をともにしていくと、決まって、彼らからは「私がこんなにも傷ついたことを（誰かに）思い知らせてやりたかったから」という怒りの表現が出てくるが、その前提にあるのは、“私の欲望をあなたはすべて察してくれるはず”という二者関係における一体感の幻想である。怒りは、一体感の幻想が破られたことに起因し、その一体感を取り戻す不毛な企てとして、自傷が繰り返されると考えられるのである。

思春期において、人は一般に、乳幼児期の分離―個体化のプロセスを心理的な次元で繰り返すのであるが、現代特有の問題を呈する学生たちは、そのプロセスの最初のところへ退行し、二者関係、つまり言語以前の関係性をやり直すという課題を抱えていると言える。今日の学生相談カウンセラーに求められているのは、その二者関係への退行に付き添い、依存に耐えてかつ破壊されず、やがて三者関係（すなわち社会）へとつないでいくという、思春期の「育ち」の支援であると特徴づけられる。そのような相談の現場では、必ずしも“ガ

イダンスとカウンセリング”が用いてきた言語的接近が効力をもつとは限らない。まずは学内に安全な居場所を提供し、言語以前の無意識の領域を含めた関係性を扱う専門的理論と技術をもって、個々の学生のこころの育ちに寄与できることが必要なのである。

ここに、近年の学生支援に対する全国的な気運の高まりのなかで、学生相談が心理臨床という専門性の視点と基盤をさらにはっきりと根づかせていくことの根拠があると筆者は考えている。学生支援と学生相談は「教育の一環」には違いないが、学生相談から見る教育とは、ある集合的な成人像（あるべき鋳型）に向けて、個々の学生を導いていくことではない。あくまでも、個々人の一生をかけた個性化、すなわちその人の自己実現の過程の一時期を支えるという、心理臨床の視点から見た「育」の営みなのである。

Ⅳ．おわりに

心理臨床の徒として学生相談の領域に入り、さまざまな時代の流れにもまれながらここまで歩んできた筆者の視点を通して、学生相談の歴史を振り返り、今日の学生相談が到達した位置と、心理臨床がその過程に果たしてきた役割について考察してみた。その作業を通し、改めて、わが国の学生相談にとって、また本学の学生相談にとって、河合隼雄先生が残してくださった功績の大きさに感謝の思いが絶えない。先生から与えられたこころの財産を、たとえそのほんの一部でも、次の世代を生きる人々に伝えていけたらと願う。

文　献（年代順）

文部省大学学術局学生課編　1953　学生助育総論――大学における新しい学生厚生補導
笠原　嘉・山田和夫編　1981　キャンパスの症状群――現代学生の不安と葛藤　弘文堂
文部省高等教育局学生課編　1989　特集・学生カウンセリング「大学と学生」第281号
近畿学生相談研究会編　1991　近畿学生相談研究会30年のあゆみ
菅野泰蔵他　1991　シンポジウム「学生相談と専門性」日本学生相談学会第９回大会発表論文集　17-21
全国学生相談研究会議編（代表：安藤延男）1991　キャンパス・カウンセリング「現代のエスプリ」293　至文堂
全国学生相談研究会議編（代表：上里一郎）1992　現代学生へのアプローチ「現代のエスプリ」294　至文堂
全国学生相談研究会議編（代表：岨中達）1992　発達カウンセリング「現代のエスプリ」295　至文堂
全国学生相談研究会議編（代表：村上英治・田畑治）1992　キャンパスでの心理臨床「現代のエスプリ」296　至文堂
伊東　博　1993　学生相談の黎明期と私「学生相談研究」第14巻第１号　31-34
河合隼雄　1994　青春の夢と遊び　岩波書店
都留春夫監修　小谷英文他編　1994　学生相談――理念・実践・理論化――　星和書店
中澤次郎他　1995　日本における学生相談理念の源泉を求めて――第30回全国学生相談研修会記念座談会――「学生相談研究」第16巻第１号　32-40
全国学生相談研究会議編　1996　全国大学学生相談ガイド　実務教育出版
峰松修編　1996　特別企画・大学生のこころの風景「こころの科学」69
河合隼雄・藤原勝紀編　1998　学生相談と心理臨床（心理臨床の実際３）　金子書房
大山泰宏　1999　「こころの時代」の大学教育を考える――SPS を振り返る作業から――第32回全国学生相談研究会議　東京（検見川）シンポジウム報告書
齋藤憲司　1999　学生相談の専門性を定置する視点――理念研究の概観と４つの大学における経験から――「学生相談研究」第20巻第１号　1-22
高石恭子　2004　私の学生相談「学生相談研究」第25巻第１号　82-93
日本学生支援機構編　2004　特集・学生相談50年――今後の指針――「大学と学生」第２号
鶴光代編　2006　特集・学生相談「臨床心理学」32　金剛出版
「臨床心理学」編集部編　2007　特集・河合隼雄――その存在と足跡「臨床心理学」43　金剛出版

ABSTRACT

On the Contribution of Clinical Psychology in the History of Student Counseling

TAKAISHI, Kyoko
Konan University

This paper considers how clinical psychology has made contribution to the field of student counseling, by reviewing the history of Japanese student counseling in post-World War II period. The development in this field seems to have been interrupted by the following three difficult factors. One was the early disintegration of the societies for the study of student counseling, especially between the Kanto area and the Kansai area. The second was the student movements of 1960-70, which worked against the practice of student counseling. The third was the conflict between the health-care model of student counseling and the SPS (student personnel services) model of that. As a result, Japanese student counseling deemed to remain on the plateau as long as 30 years.

However, in those years Japanese student counseling underwent certain significant shift from the viewpoint of clinical psychology. Particularly, the theory and practice of Jungian depth-psychology introduced by Dr. Hayao Kawai endowed a lot to improve the expertise of student counseling to this day.

Key Words : Hayao Kawai, clinical psychology, history of student counseling